Japanese Association of Educational Psychology

展　望

異文化間教育心理学研究

星野　命（国際基督教大学）
渡辺文夫（東北歯科大学）

教育心理学における最近の研究動向として認知発達（社会化），その1つとしての言語獲得，対人技能の発達，自己意識の発達などの研究がめざましい。特に気づかされるのは，クロス・カルチュラル（cross-cultural）と銘打った研究や，そのように云わなくても文化的要因を1つの変数として，また少なくとも，生活の文化的文脈の中で子どもを観察し理解しようとする試みが増加してきたことである。

しかし，かつて波多野（1974）が指摘したように，「従来の比較文化的研究にはお粗末なのが多い。比較のために共通の物差しが必要になるわけだが，この物差しが，異なった文化における行動発達の差異を表わすのに必ずしも適切でない」ことによるし，「そもそも何かやったら，なんでも他の文化でどうかと比較するというのは，あまりに必然性のない話」であるのに，その種の研究があとを絶たないことも事実である。筆者の一人（渡辺）も先に日本の1960年以降20年間の異文化間心理学の研究を概観した結果，従来の方法論的問題点を6つ指摘した（渡辺・大塚，1979）。

しかしごく最近になって，われわれが「異文化間教育心理学研究」と呼ぶアプローチについて少なくとも2つの大きな収獲があった。その1つは，東・柏木・ヘスらによる「幼児の知的機能，コミュニケーション・スタイル，教育可能性におよぼす母親・保育者の影響に関する比較文化研究」の総合報告（東ほか，1981）と，箕浦による「子どもの異文化体験：人格形成過程心理人類学的研究」（1984）である。前者については，東がさらに問題意識や共同研究の組織・運営の難しさと研究者の文化的盲点を指摘した「特別論文」を書き，それに対する野村のコメントが行われた（東，1983；野村，1983）。

後者については，箕浦がさらにその研究方法論の覚え書き（箕浦，1983）を発表しており，いずれ本格的な論評が加えられるであろうが，たまたま一方はアメリカと日本，それぞれの国における認知的社会化の研究，他方はアメリカにおける日本人子女のアメリカ文化への同化過程の質的分析ということで，そのトピックにみられる類似もさることながら，方法的にも高い信頼性と深みのある成果を挙げたという共通性が見られる（後節パーソナリティの項参照）。

筆者らは先に日本教育心理学会第24回総会に際して自主シンポジウムを行い，そのときはじめて「異文化間教育心理学」という言葉を用いて，その「課題と展望」を5名の話題提供者と2名の指定討論者によって検討した。その概要は総会発表論文集と本誌年報第22号に記したが，そこで取り上げられたことは，①諸外国，つまり異文化での教育心理学的事象の研究方法や理論が，いわば文化を超えて他の社会・文化にどこまで普遍的に妥当なものか，②異文化との接触がもたらす困難（カルチュア・ショック）と，その中で自文化（たとえば母語）を獲得保持することの困難，③海外における日本人児童・青年にみられる学習上・生活上の「弱さ」と，それに表わされた日本人教師の指導性・資質の問題点，④帰国子女の再適応の困難と民族的・文化的アイデンティティの問題，そして⑤それらによって指摘できる日本の国民教育の問題などであった。

「異文化間教育心理学」とは何か。そのような学問分野が欧米先進国において既に確立されているのか，といえば，答は明快に出せないのであるが，従来の「教育心理学」や「発達心理学」には欠けていた視点，方法，そしていくつかの問題領域を含む新しい動向としてはとらえておきたい。

その視点とは，教育現象・教育過程が，そもそも一国なり一社会の歴史と文化的文脈に根ざしている以上，その社会の現実（social reality）のただ中にいる子どもや青年の発達の姿と学習の方略を，文脈とともにとらえること，そしてそれを行うためには，歴史と文化的文脈を異にする他の社会，つまり異文化でおきていることを学び，単なる比較でなく，生活し成長し，適応し変容する人間の行動と経験，さらに内面のプロセスの共通性とともにその差異と，背景を理解することである。

その方法としては，欧米先進国で開発され輸入された観察法，検査法，調査法などを盲目的に踏襲せずに，わが社会，その文化的文脈（サブ・カルチュアの違い）を意識した方法の使用が必要である。輸入技術を用いるにしても相当の改良を加えて，その妥当性が高いものでなければならない。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

問題領域には，次のようなものが含まれるであろう。

1. 認知社会化：（文化的文脈における）図形認知・空間把握・保存・分類などの発達；漢字・かな・アルファベットの読解力・書字；二（多）重言語，NVC（非言語コミュニケーション）
2. パーソナリティ，人格形成；認知スタイル，統制源（locus of control），表出行動，感情・動機，道徳性，責任感，自己意識，発達障害，パーソナリティアセッスメント，
3. 社会的行動；対人関係（認知・魅力，コミュニケーション・スキル，原因・責任性の帰属，親子関係，仲間関係，教師・生徒関係，学級行動）
4. 異文化体験・同化適応過程：個人・集団レベルの文化摩擦，文化的障壁，復帰ショック，民族的・文化的アイデンティティ，
5. 国際理解教育過程・多文化教育心理

今回これらの問題領域に属し，我が国の内外で比較的最近の論文として発表された研究について調べた。国内の分は，単行本（専門書・参考書）以外は，国会図書館編「雑誌記事索引（1979—1983）」を用い，また，海外分についてはアメリカ心理学会のデータ・ファイル：PSYCINFO 67-84/Jun（1975—1984）と“Psychological Abstract”によって関連文献をぬきだし，東北歯科大学図書館の協力を得て国内外の図書館に発注して入手した。その中には，D. A. I.（Dissertation Abstract International）に登録されている最新（1984年5月まで）のものが含まれている。

文末に掲載した文献は200あるが，本文でそのすべてに言及できなかった。また，認知社会研究の動向に関しては，既にこの年報の「展望」欄で，田島・臼井（1980）が詳説しており，毎年度発行されている日本児童研究所編の「児童心理学の進歩」においても国内の研究については紹介されているので，ほとんど触れないこととした。

以下の記述は次の順に行う。

1. パーソナリティ
2. 自己知覚
3. 情動
4. 動機
5. 社会的行動
6. 民族，人種，国家意識，およびアイデンティティとその発達
7. 学校教育
8. 帰国適応・復帰ショック
9. 異文化間カウンセリング

1. パーソナリティ

トリアンデス（Triandis, 1980）によれば1969年以降の異文化間心理学において研究者の関心が弱まった領域は，「文化とパーソナリティ」，「価値の研究」そして「異文化間的セッティングにおける実験的ゲーム」の3つである。

そのうち，「文化とパーソナリティ」の研究が衰退した原因として次の点が指摘された。

①，パーソナリティが1つの文化内においても多様すぎること。

②，パーソナリティの計測は，1つの文化内においても限定された妥当性しか持たないのであり，ましてやいくつかの文化の間で同等に計測するのはおおよそ不可能であること。

③，伝統的なパーソナリティ変数よりも，たとえば認知的変数のような，ずっと高い信頼性で計測できる変数の方が心理学者たちに，より多くの利益をもたらすかもしれないこと。

このような事情を反映してか，近年の異文化間教育心理学におけるパーソナリティ研究の領域は，それほど広くはなっていない。たとえば，かっての B. B. Whiting や J. W. M. Whiting らの一連の研究に代表されるようなパーソナリティの比較文化的な研究は，ほとんど見られなくなった。児童，生徒を対象者とした研究の中に Eysenck Personality Questionnaire や，L. Bellak の Children's Apperception Test などを用いた比較研究（たとえば Saklofske & Eysenk, 1978や Kline & Svaste-Xuto, 1981など）や統制源（locus of control）の文化差を調べるための研究（たとえば Barling & Ficham, 1978；Halpin & Halpin, 1981；Medinnus et al., 1983など）などがあるが，各文化間の比較が主であり発達研究とはいえない。

例外的に教育心理学的な意味でまとまっている研究領域は，学校教育との関連でパーソナリティを取り扱ったものである。

1)．学業成績とパーソナリティ

(1)．学業成績と統制源（locus of control）

学業成績と内的統制とが正の相関関係にあることは，1970年代の中ごろ以前に主にアメリカでの研究ですでに確かめられていたが（Faustman & Mathews, 1980, Watkins, 1982, Kishor, 1983），1970年代後半以降，この関係が文化を越えて普遍的なものであることを示す研究が次々と発表された。これらの研究がなされた文化圏はハンガリー（Rupp & Niwicki, 1978），スリランカ（Faustman & Mathews, 1980），フィリピン（Watkins, 1982），フィジー（Kishor, 1983）などである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

用いられた尺度は，Children's Nowicki-Stricland Internality-Externality (CNSIE) 尺度 (Rupp & Nowicki, 1978 ; Kishor, 1983)，M. M. Cliford による Academic Achievement Accountability (AAA) Locus of Control Questionnaire (Faustman & Mathews, 1980)，V. Crandall らによる Intellectual Achievement Responsibility 尺度 (Watkins, 1982) など異なる種類のものであるが，いずれの尺度を使用しても各研究において内的統制源と高い学業成績との正の関係が報告されており，このことが文化を越えて普遍である，という命題が支持されている。

(2). 学業成績と外向性—内向性

アメリカ，イギリス，ウガンダで確認された「思春期前期のある時期を境に生徒の学業成績と外向性—内向性との関係が逆転する」という事象が，南アフリカの2つの民族においても見られるか否かを確かめるために，Orpen (1976) は Eysenck Personality Inventory を使用して調査を実施した。選ばれた民族は，バンツー語の一種ホサ語を話す黒人とボーア語を話す白人(ボーア人)である。

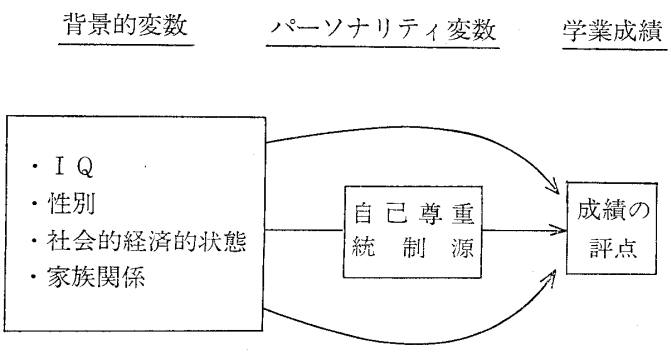
分析の結果，黒人と白人の両群において中等学校の生徒では学業成績と外向性が正の相関，一方大学生では負の相関が見られ，上述の逆転現象の普遍性が確かめられた。

(3). 学業成績とパーソナリティ研究の問題点

前述した Watkins (1982) の論文の中で，パーソナリティ変数と他の変数と学業成績の関係を Watkins は図1のようにモデル化している。このモデルを基にフィリピンで行った調査データをパス解析すると図2のような結果あった。

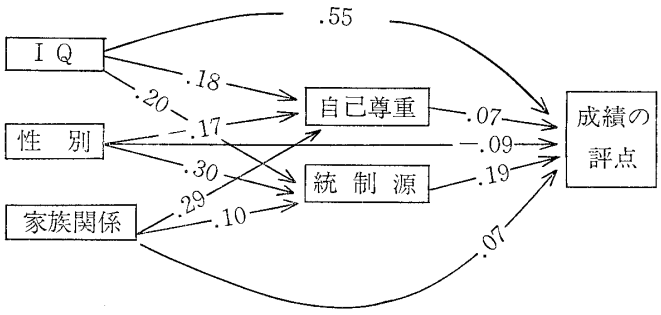
また，Barling & Ficham (1978) によると社会的経済的要因と内的統制との関連が大きいとされている。

以上のことからいえるのは，学業成績とパーソナリティの関係の研究では，他の変数との関連を研究の枠組の



(Watkins, 1982)

図1



(Watkins, 1982)

図2

中に入れておく方がより現実的に豊かで新しい情報を入手できる，ということである。

さらに，背景的変数→パーソナリティ変数→学業成績というように一方方向からだけの因果関係の分析だけではなく，次の節で紹介する Nyborg ら (1982) の論文で指摘されるように生徒や学生に対する教師の態度（成績評価の仕方も含めた）や学校組織のあり方が1つの文化的要因として生徒たちのパーソナリティ形成に与える影響を重んずる視点を組み入れ，各変数間の力動的相互作用を明らかにする方法論がこの分野での研究の発展には必要であると考えられる。

2). 学校の教育的文化的環境とパーソナリティ

Nyborg ら (1982) は，7～15歳のデンマークの子どもたち1111人を対象に Junior Eysenck Personality Questionnaire (JEPQ) を用いて調査をし，そのデータをイギリスでの他の同様な研究のデータと比較分析した。その結果，Neuroticism と Lying の尺度においてデンマークの男子がイギリスの男子より，また，Psychoticism, Extraversion, Neuroticism の各尺度でデンマークの女子がイギリスの女子より低い得点を示した。

この論文の中で Nyborg らは，Lying の尺度の結果について大きくスペースを割いて論じている。その理由は3つあって，第1に JEPQ を使用した過去の異文化間研究において Lying の尺度ではイギリスの子どもたちの得点が低かったが，今回の研究ではそれよりさらにデンマークの男子の得点が低かったこと，第2に Lying の尺度での得点は，その社会の自由放任性との関連があること，第3には東ヨーロッパの子供の方がこの尺度で得点が高いことである。

ハンガリーやユーゴスラビアの学校では権威主義，集団主義，従順さ，自己修練が重視されており，かつ，反社会的行動が西ヨーロッパの子供たちよりも抑制されていて，虚言が西ヨーロッパでよりも広く見られることを

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

他の研究を引用しながら考察の中で指摘している。このような社会的自由放任性の度合いの違いが Lying の尺度の得点に影響を与えているというのが Nyborg らの考えである。

3)．異文化接触とパーソナリティの変化と形成

パーソナリティ研究に異文化接触の場面を選ぶということは伝統的研究にはなかった新しい視点である。大衆のレベルでの異文化交流が地球的規模で拡大した現代においてそれが可能になったといってもよいであろう。

教育心理学的に意味のある研究はほとんど見られなかったが，この分野で例外的にすぐれた研究が1つあるので紹介したい。

アメリカに留学した日本人大学生のパーソナリティの変化についての研究（Kumagai, 1977）では，留学はパーソナリティに変化を及ぼさなかった，と報告された。

しかし，異文化接触に伴うパーソナリティの変容は，精神発達のどの段階で異文化体験があったかによって大きく質が異なることを示した研究がある。この研究（箕浦，1984）は，社会科学的研究の方法論における量と質の問題の調和，現象への切りこみ方という2点ですぐれている。

箕浦は，パーソナリティの発達過程を探るために同一文化内では見つけ難いような影響要因が設定し易い子供の異文化体験を研究課題として取りあげた。焦点があてられたのは，認知，行動，情動の側面である。分析の結果，J. Piaget の発達段階を基に設定された，9～14・15歳において対人関係での文化的影響を強く受ける（文化文法体得の臨界期），という仮説が支持された。異文化体験をしたのが，この臨界期の時期であるのかあるいはその前なのか後なのかによって，パーソナリティ形成に与える文化的影響は質的に異なる，とされた。

また，パーソナリティの体系の中に文化的なるものが取り入れられる過程で重要な影響を及ぼす要因が，年齢，言語，家庭環境，同輩集団などであることが明らかにされた。

2. 自己知覚

自己知覚に関する教育心理学的異文化間研究としては，学習に関するものがいくつかあったので，ここではそれらを取りあげたい。

1)．学業に関する自己知覚

学業に関する自己知覚の項目が組みこまれた自己概念尺度を用いた研究がある。いずれの研究の場合も学業に関する自己知覚に文化差があることが報告されている。

Weinland ら（1976）は，S. Coopersmith の Self-esteem Inventory に基づいて作成した自己概念尺度を使い，デンマークとアメリカの子供たちの比較をした。彼らの仮説の1つは，デンマークはアメリカに比べ福祉が約束されているので「成功しなければならない」という精神的圧力が少なく自己概念尺度の中の学校での達成についての項目（たとえば「自分の学業を私は誇りにしている」，「私は，学業に最善をつくしている」など）での得点はアメリカの子供たちの方がより高い，というものだった。分析の結果，仮説が支持された。

自己尊重（self-esteem）と学業能力との正の相関は，タイの子供の方がアメリカの子供より高く，またタイ系タイ人よりも中国系タイ人の方がその相関が高い，という報告（Subhadhira, 1976）もある。

イギリス人とナイジェリアのヨルバ族との比較研究（Olowu, 1983）では，イギリス人の生徒の方が，学業に関する自己概念が高いことが示された。その考察の中で，この結果の原因として，①ナイジェリアでは中等教育は最近始まったばかりであること，②栄養不足が社会的場面でのより劣った自己概念の形成に影響を与えていること，③家族の中で子供の数が多く，そのことが学業に関する自己概念がより低いという結果と関係があること，などをあげ，関連の文献を引用しながら説明している。

ナイジェリアの生徒たちの自己概念をより肯定的なものとするためには，学校のカリキュラム，組織，教師の生徒に対する態度などをナイジェリアの文化・風土に合ったものにしていく必要がある，と説いている。

2)．自己知覚研究の問題点

上で紹介した研究は，すべて自己の学業に対する自己知覚を問う質問紙法で行われている。一般的に社会的望ましさや反応傾向の程度に文化差があるとする研究は，多くある（渡辺・大塚，1979）。このことから，特に公的な場で自己についての評価をする場合，その反応の仕方に文化的な違いがあることは，容易に推測できる。学業についての自己知覚と客観的な学業成績との対応度をまず各文化において検討し，その結果に従って異文化間研究を実施することが望まれる。

3. 情勢

「社会化の過程や育児の態度あるいは慣習が，共感的行動の重要な決定因である」という命題の検証が，同一文化内では難しいことを理由に，親の育児の仕方が極端に違うギリシャとアメリカが選ばれ実施された研究（Roe, 1977）がある。ギリシャでは母親の子供に対するしつけは，権威的に厳しく行われ，一方アメリカの母親は，より寛容である。分析の結果，アメリカの子供たちの方がより共感が高かった。「親の育児の仕方が厳しいほど子供たちの共感の感覚は弱まる」という仮説は，支持された。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

乳児の感情表現が文化的環境の違いによってどのような影響を受けるのかについて調べるために Landau (1982) は，イスラエル在住のベドウィン族（アラブ人）とキブツ，施設，都市部の中流および下層階級の家族を対象に観察調査を実施した。ベドウィン族の間では，乳児が泣いたり騒いだりすると，母親がその時に何をしていようともそれを止め即座に対応することが習慣となっている。分析の結果，乳児の騒ぎたてる行動の出現率と，親や世話人のその行動に対する即座の対応の出現率が正の関係にあることが見られた。これは，Bell & Ainsworth (1972) のアメリカでの研究結果とは逆の結論となっているが，Landau の考えでは，これはアメリカの場合母親の対応の仕方がベドウィン族と基本的に異なるためであって，行動分析学的解釈からしても2つの研究結果には矛盾はないとされた。方法的によく練られた研究である。

情動に関連したその他の研究として Kilbride & Yarczower (1980) による顔の表情の認知と模倣の研究（ザンビアとアメリカの児童と青年の比較）や Hazer ら (1981) の職業に対する情動の研究（30の文化の高校生）などがあげられる。前者では研究者らが自ら認めているように，2つの比較対象群の内の片方の群である白人の顔写真だけを刺激素材として用いたため，このことが結果に影響を及ぼしている可能性があるし，また発達的考察もアメリカの対象者についてのみなされている，という問題点がある。後者では，考察の章で異文化間発達研究の必要性を述べているだけである。

4. 動機

Barrett & Nicholls (1978) は，ニュージーランド国内において社会経済的に劣位にある現住民マオリ族と優位にある白人の子供たちを対象に研究を行い「テスト場面において経済的に貧している子供たちのテスト成績が彼らの不安や用心深さ (wariness) によって悪くなる」という命題の検討を試みた。その結果，この命題は支持されたが，Barrett & Nicholls らはこのことが「恥ずかしさ」とか「自信のなさ」というような動機の欠損が原因と考えるのではなく，マオリ族の文化的価値観が，協調と対人的な扶養を重んずるということの現われである，という解釈もなりたちうるとした。このようなマオリ族の子供たちのためにより援助的な雰囲気を学級内のテストの場面で作る必要がある，と Barrett & Nicholls は述べている。

問題点を1つあげたい。このような異文化間教育心理学的研究の成果が，少数民族の立場を重んじた教育政策を立案するために利用されることを歓迎しない訳ではないが，ここでの命題にあるように，社会経済的地位が学習における動機に対して重要な変数だとすれば，その地位の改善にも研究者は関心を持つ責任があるだろう。現状維持あるいは保存のために利用される研究であってはならない。

5. 社会的行動

1). 道徳，服従と逸説

(1). 道徳

Ziv ら (1978) は，異なる社会化の過程を経た子供たちは，道徳的判断も異なるだろうという仮説を立て，イスラエルの3つの文化的に違った集団（キブツのユダヤ人，アラブ人，都市部のユダヤ人）を選び調査をした。用いた尺度は，道徳実在論－道徳相対論の尺度である。社会化の過程においてキブツのユダヤ人では仲間の影響が大きく，アラブ人では大人の影響が大きい。都市部のユダヤ人では，キブツのユダヤ人とアラブ人との中間的影響が見られる。

分析の結果，都市部のユダヤ人の子供たちはアラブ人やキブツの子供たちより道徳相対論的であった。アラブ人やキブツの子供たちは，極めてホモジニアスな社会的生育環境で育ったのに比べ，イスラエルの都市部には，80か国もの国から移住してきたユダヤ人が住みヘテロジニアスな社会的生育環境であることが，この結果に反映していることを Ziv らは指摘している。

L. Kohlberg の道徳意識の発達段階が，キブツで育った子供たち (Snarey, 1982) やトルコ人 (Turiel et al., 1978) においても妥当するという報告がある。

(2). 服従と逸説

Kazemi (1983) は，イランとアメリカの子供とを対象に服従と逸説についての研究をした。その中で，子供自身の欲求と両親の抑制との間に葛藤が起きた時の道徳的次元に対する感受性は，年齢とともに高まる，と報告している。

2). 協力と競争および葛藤解決

(1). 協力と競争と兄弟数と出生順

アングロ系アメリカ人とメキシコ系アメリカ人の協力と競争という社会的行動における差異（たとえば，アングロ系アメリカ人の子供の方が，メキシコ系アメリカ人2世より競争的である <Knight et al., 1977> が，家族の中の兄弟の数の大きさや出生順位と関係があるのか否かを Knight & Kagan (1982) は，確かめようとした。その結果，そのような関係は見られなかった。

(2). 葛藤解決

上で述べたようなアメリカ人とメキシコ人の子供たちの協力と競争に関する研究が，限られた年齢とサンプル数でかつ自由な反応ができないような実験的ゲームの方法を取っていることによる方法論上の限界を乗り越える

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ために，open-endedな質問を用い年齢の幅もサンプル数も拡大して同じ研究者らが改めて調査（Kagan et al., 1982）をした。その結果，それまでアングロ系アメリカ人とメキシコ人との間に差が見られていたことが，低年齢層の子供に限ってのみ見られるということができ，高年齢層になるに従い次第に差がなくなる傾向が報告された。

Kaganらの研究課題は，子供たちが対人関係上で体験する葛藤場面に対する子供たちの解決行動であった。その行動が分類され分析された。

教師と母親の葛藤解決についての日米比較（Kurachi, 1984）については，学校教育の節で紹介する。

6. 民族，人種，国家意識およびアイデンティティとその発達

「特定の民族や人種に対する集団としての好みや拒絶は，年齢が高くなるに従って弱くなる」という命題が，いくつかの文化における研究で支持されている（渡辺・大迫，1976；Watanabe et al., 1977；George & Hoppe, 1979）。しかしながら，民族に対する選択（好み）の研究では，性別と年令をコントロールしなければならない（Levine & Ruiz, 1978），という指摘がある。

また，国，民族，人種に対する知覚が，年齢が低い子供ほど物質的，物理的，具体的であり，年齢が高くなると政治的，道徳的，心理的，抽象的，質的になる（渡辺・大迫1976；Watanabe et al., 1977；Nugent, 1980；箕浦，1984）傾向もいくつかの文化での研究で同じように認められている。この傾向とJ. Piagetの発達段階との比較（箕浦，1984）もなされている。

しかし，以上のような現象の程度，強さ，質には，各文化で違いがみられる。

たとえば，George & Hoppe（1979）の研究では，カナダのインディアンの子供と白人の子供双方において，白人に対する好みあるいは他の人種に対する拒絶などは，年齢とともに減少するが，インディアンの方が白人より拒絶の率が全体的に高い，と報告されている。

また，日本とフィリピンの子供たちの人種に対する好みは，それぞれ年齢とともにヘテロジニアスになる傾向が見られるが，どの人種が好まれるかその順位は，日本とフィリピンでは異なっている（渡辺・大迫，1976；Watanabe et al., 1977）。

さらに，アメリカの黒人とメキシコ人，そしてアングロ系アメリカ人との比較（LeVine & Ruiz, 1978）では，自分が属する民族に対する好みの強さは，年令に関係なく黒人，メキシコ人，アングロ系アメリカ人の順で強かった。

国家に対する知覚については，文化を越えて共通に年齢とともにその知覚がより物理的でなく，価値的，心理的になる傾向が報告（Nugent, 1980）されているが，しかしアメリカの子供の方が国をより政治的（民主的，社会政治的な平等など）環境として，かつ民族中心主義的に見，アイルランドの子供は，それと対象的に心理的（国民性，伝統文化の重要性）環境として見る傾向が強い，とされた。

少数民族の方が年齢的により早く人種意識を形成する，という報告（George & Hoppe, 1979）もある。これは，箕浦（1984）が投げ掛けた「文化的アイデンティティの形成過程に文化差があるのか」という問題への答えのための1つの材料となるであろう．

人種や民族に関するアイデンティティの発達に影響を及ぼす要因として，人種や民族の多様性や同質性よりもその階層性の方が重要である，という指摘（Morland & Hwang., 1981）は興味深い。

また，文化的アイデンティティ：文化的自己（箕浦，1984）が発生する時期は，9～11歳ごろである，という報告（箕浦，1984）は注目に値する。

外国において長く生活した大学生の自叙伝を用いて，ナショナル・アイデンティティの形成過程とパターンを探る試み（星野，1980，1983b，1983c）もなされている。

7. 学校教育

1)．西欧的な学校教育と認知発達

Rogoff（1981）は，西欧的な教育が認知的発達に及ぼす影響について，種々の文化における研究をレヴューした。その結果，西欧的教育を受ける子供たちは，次の点においてすぐれていることが示された。①2次元的刺激素材において奥行きを表わすための慣例的図式化の方法の使用，②2次元的パターンの分析，③関連性のない情報をむらなく覚えること，④関係のない特徴を組織だてるような方法を自発的に取ること，⑤分類学的に対象を組織化すること，⑥分類作業のある次元を他の次元に容易に変更でき，また分類化による構成の基盤を説明できること，⑦J. Piagetのテストの中で形式的操作のテストの成績（具体的操期のテストを用いた研究では，一致した結果が得られていない）。

2)．その他

集められた学校教育に関する文献は，研究の課題がまちまちであるので，以下並列的に紹介するに止める。

ドグマティズムと問題児に対する教師の知覚との間には関連があり，ギリシャ人の教師はアメリカ人の教師よりドグマティズムが強い，という報告（Xeromeritou-Tsaklanganos, 1978）がある。

また，理科教育の授業においてカナダの教師は，より

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

教訓的でかつ集中的問題解決を強調し，一方イギリスの教師は，実習と生徒の自己発見的教育法を重視する（Hacker et al., 1979）ことも見出されている。

教室の様子をミニチュアセットで模倣させる方法が，学校教育に対する子供の価値観の異文化間的研究に使用できる，という試み（Pickford, 1982）も発表された。

パリの日本人学校の生徒の中で，日本から直接転校してきた群とフランスの学校から転校してきた群との間に対人関係的問題があり，第3国から転校した群は，この2つの群の間の問題には距離を取っている，と報告（大森，1981）された。

また，幼稚園あるいは保育園の教師と児童の母親との間に児童の危機的出来事をめぐって葛藤が引き起こされた時に，アメリカ人の母親は，その出来事の責任が明確に自分にあると分った時にのみ責任を取り，日本人の母親は，いつでも幾分自分におちどがあり責任があるというふうに感じる傾向がある（Kurachi, 1984）ことも示された。

8. 帰国適応・復帰ショック

これはここ2，3年間において日本のみならず外国でも急激に関心を集め出したトピックで，Church (1982) の丁寧な総覧があるほか，個々の研究が目立ちはじめている。Brein & David (1971) の論文は，そのはしりといえるが，Furuhashi (1984) のものは，東京学芸大学付属大泉中高の特設学級の帰国生の再適応のパターンを取り出した最も新しい研究である。松原は少し前に帰国子女の学校生活への適応一般（松原，1982）と，民族的意識・集団同調性・個人指向性が海外体験とどう関わるかを示した（松原・伊藤，1982）。石田と田中（1983）は，帰国大学生の日本語学力と海外生活との関係について，データに基づいて論じた。中津（1983）は，幼児・児童期を海外で過ごし現地の教育を受けた者の，現地での，また帰国後にその心の中に形成される状況図（認知地図）を，親のそれとの比較において，かなりこまかく理論的に考察した。また高萩ら（1982）は操作的帰納的に海外帰国子女のカルチャー・ショックの分析を行い，要因としては比較的単純な条件を見出したが，それがおこる個体—状況の関係や文化的文脈への配慮に不十分なところが残った。

White (1980) は，外国人として恐らく初めて日本人帰国子女問題をとりあげ，グループ・バウンダリィ（集団の壁）との関連を論じた。

9. 異文化間カウンセリング

これはハワイの東西センターやミネソタ大学，コロンビア大学などにはじまった，主として多民族学校社会のメンバー，つまり言語や，また宗教などの観念体系や，対人関係のルールやコミュニケーション・スタイルを異にする児童・生徒学生を常に相手としているカウンセラーや教師や他のリーダーに必要な態度とスキルを学ばせ，来談者の改善・治療に役立てようとするもので，Pedersen ら（1976, 1981）が理論と方法，また実際的考察に関する研究論文を集めたが，Sweeney ら（1980）は，アメリカ人と日本人でカウンセリングを学ぶ学生のN. V. C., すなわち非言語的コミュニケーションのパターンを比較した。また，Tinloy (1978) はカウンセリングに来談するアジア系アメリカ人の価値観について他のアメリカ人との差異を報告している。また，カウンセリングではしばしば問題になる「共感」，特に異文化間の共感は訓練できるか，という問に対して Tucker (1978) は，異文化環境において学部学生の共感性を増大させる心理教育プログラムを作ろうと試みている。

大塚(1983)は，恐らく日本で初めて異文化間カウンセリングについてコロンビア大学大学院での2年間の実習（主として高校をドロップ・アウトしたスペイン系移民や黒人の子女が相手）を行った体験を，a. コミュニケーション，b. エンパシー，c. 寛容さ，d. 文化，e. 感受性，f. 日本人としての易しさ・難しさ，g. ひとりの人間として接すること，h. 不安，i. 人間性を養い，自分を知ること，の9点にまとめて論述している。

この分野は，わが国においても，ふつうは単純に1つずつのケースとして研究されている少数民族出身者，被差別住民，離島出身者，移住転学児童・生徒に対して，大都市の中流出身で大学出のカウンセラーが当然配慮すべき事柄について，今後もっと注意を喚起すべきだとの示唆を含んでいる。

おわりに

「異文化間教育心理学研究」と大きく銘打ったわりには展望はかなりせせこましいものになったかも知れない。「認知の社会化」という幅員の大きな流れを別にすると，あとは細い流れが見えかくれしているわけで，そこに流入してくる研究の水は確実に増えているものの，切れ間なく続いている訳ではない。ことに国内における研究は，これからという所であろう。この展望が，その呼び水になれば幸いである。

文　献

安達喜美子・Beach, K.・根本葉子 1982 分類行動における認知スタイルの比較文化的研究 (1) 認知スタイルの安全性について 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）31, 117–123.

Adler, L. L. (eds.) 1977 Issues in Cross-Cultural re-

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

search. Annuals of the New York Academy of Sciences, 285.

Adler L. L. (ed.) 1982 Cross-Cultural Research at Issues. Academic Press.

秋山道彦　1981　言語獲得における日本語と英語　児童心理学の進歩　1981年度版

秋山道彦・武井澄子・斎藤こずゑ　1982　子どもにおける命題証明と疑問応答　教育心理学研究　XXX (4), 265–273.

穐山貞登(編著)　1983　文化の心理学　朝倉書店

東洋　1983〔特別論文〕Cross-cultural な発達研究—日米共同研究の経験に立って　児童心理学の進歩　1983年度版　305–327.

東洋・柏木恵子・R. D. ヘス　1981　母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究　東京大学出版会

東洋・柏木恵子　1980　母親の態度　行動と子どもの知的発達に関する日米比較研究〔概要〕(タイプ印刷版)

Barling, J. & Ficham, F. 1978 Locus of control beliefs in male and female Indian and white schoolchildren in South Africa. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 227–235.

Barrett, C. A. & Nicholls. J. G. 1978 Motivation factors in the Peabody Picture Vocabulary Test: Performance of New Zealand children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 349–357.

Beauchamp, E. R. 1978 Learning to be Japanese. Linnet Books.

Bell, S. M. & Ainsworth, M. S. 1972 Infant crying and maternal responses. *Child Development*, 43, 1171–1190.

Berry, J. W. 1979 Rerearch in multicultural societies: Implications of cross-cultural methods. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 10, 415–434.

Berry, J. W. 1976 Human Ecology and Cognitive Style: Comparative Studies in Cultural and Psychological Adaptation. Halsted Press.

Berry, J. W. & Dasen, P. R. eds. 1973 Culture and cognition: Readings in Cross-Cultural Psychology. Methuen.

Bochner, S. 1977 The mediating man and cultural diversity. In Brislin, R. W. (ed.) *Culture Learning: Concepts, Applications, and Research.* University Press of Hawaii.

Bochner, S. 1979 Growing up in a multicultural world: Theory and empirical research. Family. Child and Mental Health. (Proceedings of Western Pacific Regional Workshop on Mental Health, W. H. O.) 284–295.

Bond, M. 1979 Dimensions used in percieving peers: Cross-cultural comparisons of Hong Kong, Japanese, American and Filipino University students. *International Journal of Psychology*, 14, 47–56.

Brein, M. & David, H. 1971 Intercultural communication and the adjustment of the sojourner. *Psychological Bulletin*, 76:3, 215–230.

Brislin, R. W. 1983 Cross-cultural research in psychology. *Annual Review of Psychology* 34, 363–400.

Brislin, R. W., Bochner, S. & Lommer. W. J. (eds.) 1975 Cross-cultural perspectives on learning. Wiley.

Brislin, R. W. & Van Buren IV, H. 1974 Can they go home again? *International Educational and Cultural Exchange*, 9(4), 19–24.

Bronfenbrenner, U. 1979 The Ecology on Human Development. Harvard University Press.

Church, A. T. 1982 Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 546–572.

Cionini, L., Smith, P., Magaro, P. & Velecogna. F. 1979 Relationship between sex, age, education and field-dependence: A cross-cultural comparison. *Perceptual and Motor Skills*, 49, 581–582.

Cole, M., Gay, J., Glick, J. A. & Sharp, D. W. 1971 The Cultural Context of Learning and Thinking. Bacic Books.

Cole, M. and Scribner, S. 1975 Theorizing about socialization of cognition. In Schwartz, T. (ed.) *Socialization as Cultural Communication*, University of California Press. 157–176.

Cole, M. & Scribner, S. 1974 Culture and Thought: A Psychological Introduction. John Wiley.

Cole, M., Sharp, D. W. & Lave, C. 1978 The cognitive consequences of education: Some empirical evidence and theoretical misgivings. *The Urban Review*. 218–233.

Conroy, M. Hess, R. D., Azuma, H. & Kashiwagi, K. 1980 Maternal strategy for regulating children's behavior-Japanese and American families. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 11, 153–172.

Cronbach, L. J. and Drenth, P. G. 1972 Mental Tests and cultural Adaptation. Mouton.

Cummins, J. 1980 Psychological Assessment of Immigrant Children: Logic or intuition. *Journal of Multi-Cultural Development*, 1&2, 97–111.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Dasen, P. R. 1977 Introduction in Piagetian Psychology: Cross-Cultural Contributions. Garden Press.

Dasen, P. R. & Heron. A. 1981 Cross-cultural tests of Piaget's theory. In Triandis, H. C. & Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 4, 295–341, Allyn & Bacon.

Dawis, R. V. 1978 A paradigm and model for the cross-cultural study of counseling. *Personnel & Guidance Journal*. 56, 463–466.

Dicson, W. P. Hess, R. D., Miyake, N. & Azuma, H. 1978 Referential comminicaiton accuracy between mother and child as a predictor of cognitive development in the United States and Japan. *Child Development*, 50, 53–59.

Dien, D. S. -F. & Fujisawa, H. 1979 Machiavellianism in Japan: A longitudinal study. *Journal of Cross-cultural Psyhcology*, 10, 508–516.

Driver, E. D. 1968 Self-conseptions in Indiaand the United states: A cross-cultural validation of the Twenty Statement Test. *The Sociological Quarterly*, 9, 341–354.

Ekstrand, L. H. 1976 Adjustment among immigrant pupils in Sweden. *International Review of Applied Psychology*, 25(3), 167–188.

江淵一公 1974 海外教育研究入門 サイマル出版会

江淵一公 1977 「一人前」の文化人類学的考察 青年心理 5

Faustman, W. & Mathews, W. M. 1980 Perception of personal control and academic achievement in Sri Lanka: Cross-culrual generality of American research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 11, 245–252.

フォックス, L. K. ・松園万亀雄 (訳) 1983 ぼくらの幼年期 (そしおぶっくす) 社会思想社

Furuhashi, S. 1984 Foreign in thier own land: Returnee children's patterns of adjustment into Japanese schools, Unpublished Master Thesis, Graduate Division of the University of Hawaii.

藤永保 1979 知的行動・能力と文化的条件 星野命 (編) 人間探求の社会心理学 4 人間と文化 1章 朝倉書店 9–28

Goerge, D. M. & Hoppe, R. A. 1979 Racial identification, preference, and self-concept: Canadian Indian and white children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 10, 85–100.

Hacker, R. G., Hawkes, L. & Heffernan, M. K. 1979 A cross-cultural study of science classroom interactions. *British Journal of Educational Psychology*, 49, 51–59.

Halpin, G. & Halpin, G. 1981 Locus of control and self-esteem among American Indians and whites: A corss-cultural comparison. *Psychological Reports*, 48, 91–98.

花沢成一 1982 母性意識の比較文化的研究 日本大学人文科学研究所研究紀要 26, 80–96.

原ひろ子 1982 育児 教育文化と人間形成 講座現代心理学 8 文化と人間 第2章 小学館 61–113.

波多野誼余夫 1974 概観児童心理学の進歩 1974年度版, 1—20

Hatano, G., Miyake K., Tajima. N., 1980 Mother behavior in an unstructured situation and child's acquisition of number conservation. *Child Development*, 51, 379–385.

波多野完治 1973 世界の学校 日本の学校—体験的比較教育学 創造選書 小学館

Harkness, S. 1980 The cultural context of child development. *New Directions for Child Development*, 8, 7–13.

Hazer, J. T., Tzeng, O. C. S., Reissman, L. & Landis, D. 1981 Cross-cultural determinats of occupational affect. *Journal of Occupational Psychology*, 54, 195–211.

Hess, R. D., Kashiwagi, K., Azuma, H., Prince, G. G. & Dickson, W. P. 1980 Maternal expectations for mastery of developmental tasks in Japan and the United States. *International Journal of Psychology*, 15, 259–271.

日高博子 1984 ゴンザの子どもたち—ケニヤ ナイロビ日本人学校教師の記録 ほるぷ出版

比嘉正範 1976 二つの言語 二つの文化 月刊言語 5(10) 18–26.

樋口勝也 1983 短大生の異文化体験—ホームステイ体験の三つの事例—文化と人間の会(編) 異文化との出会い 川島書店 53–690.

樋口勝也・菊地章夫 1982 a. b. 青年期の異文化体験 (一) (二) 青年心理 35, 829–844.

星川裕子 1977 対人意識に関する比較文化的研究 横浜国立大学教育学部卒業論文

星野命 1979a 心理学における異文化間研究—異文化間心理学の特質と設題 心理学評論 22, 214–235.

星野命 1979b 社会化の比較文化論 菊池章夫 斎藤耕

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

二（編）社会化の理論　10章　有斐閣　185–213.
星野命　1980　帰ってきた私たち—帰国学生の自叙伝から　星野命（編，解説）　カルチャー　ショック　現代のエスプリ　161　至文堂　223–228.
星野命　1982　個人レベルの文化摩擦について　大林太良　（編）　文化摩擦の一般理論　巌南堂書店　273–302
星野命　1983a カルチュア　ショック　永野重史　依田明（編）　文化の中の人間　新曜社　215–255
星野命　1983b 青年の異文化体験とナショナル　アイデンティ　青年心理学研究会（編）　現代青年の心理　第1章　福村出版　7–26.
星野命　1983c 子どもたちの異文化体験とアイデンティ　小林哲也（編）　異文化に育つ子どもたち2章　有斐閣　28–60.
星野命・新倉涼子　1983　海外帰国児童・生徒受入れに関する小学校・中学校教師の意識調査　東京学芸大学海外子女教育センター紀要　2，21–54.
Hsieh, T., Shybut, J. & Lotsof, E. 1969 Internal-external control and ethnic group membership: A cross-cultural comparison. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 122–124.
Inkeles, A. 1975 Becoming modern: Individual change in six developing countries. In Schwartz, T. (ed.) *Socialization as cultural communication*, University of California Press, 231–250.
Inkeles, A. & Smith, D. H. 1974 Becoming Modern: Individual Change in Six Developing Countries. Harvard University Press.
井上健治　1979　子どもの発達と環境　東京大学出版会
井上佳朗　1984　外国人に対する認知構造の多次元解析に関する研究　鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集　20，1–30.
Irwin, M. H., Schafer, G. N. & Feiden, C. P. 1974 Emic and unfamiliar category sorting of Mao farmers and U. S. undergraduates. *Journal of Cross-Cultural Ptychology*, 125, 407–423.
石田敏子・田中和美　1983　帰国学生の日本語学力と海外生活の関係についての一考察　国際基督教大学 Annual Report No. 8.
岩脇三良　1981　集団指向と場依存型—日本の子どもたち—中央大学文学部紀要　16(2) 19–31.
Izard, C. E. 1981 Cross-cultural perspectives on emotion and emotion communication. In Triandis, H. C. et al. (eds.) *Handbook of Cross-Culturnl Psychology*, Vol. 3, 185–222, Allyn & Bacon.
Jones, E. E. & Zoppel, C. L. 1979 Personality differences among Blacks in Jamaica and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 10, 435–457.
Just, M. A. & Carpenter, P. A, 1975 Comparative Studies of Comprehension: An investigation of Chinese, Norwegian, and English. *Memory & Cognition*, 3, 465–473.
Kagan, J. & Klein, R. E. 1973 Cross-cultural perspectives on early development. *American Psychologist*, 11, 947–961.
Kagan, S., Knight, G. P. & Martinez-Romero, S. 1982 Culture and the development of conflict resolution style. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 13, 43–53.
上條雅子　1983　日本におけるバイリンガリズム教育計画に関する比較的研究—海外帰国子女教育問題と解決策—東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要，第2集　5–19.
片多順　1980　文化環境と知的発達—民族と知能　教育と医学　28，160–164.
川端末人　ほか　1982　海外日本人児童生徒の異文化理解の親の意識—数量的分析による考察　日本比較教育学会紀要，8，43–45.
柏木恵子・東洋　1977　日米の母親における幼児への発達期待および就学前教育観　教育心理学研究，25，242–253.
柏木恵子　1979　社会的学習としての発達の文化差とその要因　心理学評論，22(3)，278–294.
柏木恵子・東洋　1981　日米の認知的社会化過程における性別化　心理学研究　52(2)，296–300.
Kashiwagi, K., Azuma, H. & Miyake, K. 1982 Early maternal influences upon later cognitive development among Japanese children: A follow-up study. *Japanese psychological Research*, 24, 90–100.
柏木恵子　1983　子どもの自己の発達　東京大学出版会
鹿住秋子　1983　南フランス中学校日記　毎日新聞社
Kazemi, V. 1983 Obedience and transgression in chidren's stories: A cross-cultural comparison of Indian and American children. *Dissertation Abstracts International*. 43(A), 3271.
加藤厚・加藤隆勝　1984　帰国高校生におけるIdentityの特徴　筑波大心理学研究，6，57–66.
菊地章夫　1979　異文化間研究の方法と問題　心理学評論　22(3)，236–245.
菊地章夫・斎藤耕二（編）　1979　社会化の理論　有斐閣
菊地章夫・樋口勝也　1982　短大生の異文化体験　日本

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

社会心理学会第23回大会発表論文集，147–148.

Kilbride, J. E. & Yarczower, M. 1980 Recognition and imitation of facial expressions: A cross-cultural comparison between Zambia and the United States. *Journal of Cross-Culturtasl Psychology*, 11, 281–296.

Kishor, N. 1983 Locus of control and academic achievement; Ethnic discrepancies among Fijians. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 14, 297–308.

Kline, P. & Svaste-Xuto, B. 1981 The responses of Thai and British children to the children's apperception test. *The Journal of Social Psychology*, 113, 137–138.

Knapp, P. & Seagrim, G. 1981 Visual memory in Australian aboriginal children and children of European descent. *International Journal of Psychology*, 16, 213–231.

Knight, G. P. & Kagan, S. 1977 Acculturation of prosocial and competitive behaviors among second- and third-genaration Mexican-American children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 8, 273–284.

Knight, G. P. & Kagan, S. 1982 Siblings, birth order, and cooperative social behavior: A comparison of Anglo-American and Mexican-American children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 13, 239–249.

小林哲也　1981　海外子女教育　帰国子児教育　有斐閣

小林哲也　1982　海外帰国子女の教育の改善について（教育の国際交流の改善に関する研究）　日本比較教育学会紀要，8，37–41.

窪田守弘　1982　帰国子女の精神構造　日本比較教育学会紀要，8，59–64.

Kumagai, F 1977 The effect of cross-cultural education on attitudes and personality of Japanese Students. *Sociology of Education*, 50, 40–47.

Kurachi, A. 1984 Reactions to an incident involving a child in school: A comparison of Japanese and American mothers and teachers' reactions. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 15, 321–336.

Lambert, W. & Tan, A. 1979 Expressive styles and strategies in the aggressive actions of children of six cultures. *Ethos*, 7, 19–36.

Landau, R. 1982 Infant crying and fussing: Findings from a cross-cultural study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 13, 427–444.

Leiderman, P. H., Tulkin, S. R. & Rosenfeld A. (eds.) 1977 Culture and Infancy Variations in the Human Experience. Academic Press.

Leiderman, P. H. & Tulkin, S. (eds.) 1975 Cultural and Social Influence in Infancy and Early Childhood. Stanford University Press.

LeVine, E. S. & Ruiz, R. A. 1978 An exploration of multicorrelate of ethnic group choice. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 179–190.

Marsella, A., Tharp, R. & Ciborowski, T. (eds.) 1979 Perspectives on Cross-Cultural Psychology. Academic Press.

松原達哉・伊藤咲子　1982　海外帰国子女の民族的帰属意識・集団同調性・個人指向性の研究　東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要，1，5–24.

松原達哉　1982　海外帰国子女の学校生活への適応問題　人間研究，18，138–175.

松下覚・末岡一伯　1975　文化差と言語連想　僻地教育研究，22(1)，33–45.

McGinnies, E. L. Nordholm, L., Ward, C. D. 1974 Sex and cultural differences in perceived locus of control among students in five countries. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 441–445.

Medinnus, G. R. . Ford, M. Z. & Tack-Robinson, S. 1983 Locus of control: A cross-cultural comparison. *Psychological Reports*, 53, 131–134.

Minoura, Y. 1979 Life in between: The acquisition of cultural identity among Japanese children living in the United States. Doctoral dissertation Graduate School of Anthropology, University of California, Los Angeles.

箕浦康子　1981　バイリンガリズムの形成過程とその関与因—在米日本人児童の場合—　岡山大学文学部紀要（哲学）　2，75–86.

箕浦康子　1983　異文化体験研究方法論覚え書き—質的分析と量的分析をめぐって—　文化と人間の会（編）異文化との出会い　川島書店　98–108.

箕浦康子　1984　子供の異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究　思索社

三宅和夫　1976　幼児心理学　共立出版　70–76.

三宅なほみ・大嶋百合子　1978 日米における referential communication 場面での母親　教師のコミュニケーションスタイル　東京大学教育学部紀要，17，165–185.

三宅なほみ・東洋　1979　母親のコミュニケーションスタイルとその子供の認知発達に及ぼす影響—図形伝

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

達課題における日米比較―　教育心理学研究，27，75-84.

宮本美沙子　1979　動機づけ・感情の異文化間研究　心理学評論，22，(3)，295-305.

Monroe, R. H. Monroe, R. L. & Whiting, B. (eds.) 1981 Handbook of Cross-cultural Human Development. Garland STPM Press.

Morland, J. K. & Hwang, C. 1981 Racial/ethnic identity of preschool children: Comparing Taiwan, Hong Kong, and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 12, 409-424.

永野重史　1981　概観，児童心理学の進歩　1981年版，1-19.

中津燎子　1983　幼児・児童期を海外で育つことの意味――その理念型の素描――国際教育研究3，東京学芸大学海外子女教育センター（西村研究室），30-40.

野村庄吾・岡本夏木・マルスン・ビモワルギド・ヤプシルガンディー　ウイラワン　1980　ジャワの子らの子守り（Momong）―　日本　インドネシアの文化比較による発達心理学的研究　京都教育大学紀要，Sec. A. 57，113-123.

野村庄吾　1983　コメント―「Cross―Cultural な発達研究」について―児童心理学の進歩　1983年度版

Nugent, J. K. 1980 The development of the child's relation to his country: A cross-cultural study. *Dissertation Abstracts International*, 41(B), 2359.

Nyborg, H., Eysenck, S. B. G. & Kroll, N. 1982 Cross-cultural comparison of personality in Danish and English children. *Scandinavian Journal of Psychology*, 23, 291-297.

小川捷之・林洋一・永井撤・白石秀人　1979　対人恐怖者に認められる対人不安意識に関する研究―比較文化的観点から―横浜国立大学教育学部紀要 19, 205-220.

小川捷之・木村方美・林洋一　1980　対人恐怖者に認められる対人不安意識に関する研究(3)　―幼児期の家庭環境と自己像に関する比較文化的検討　横浜国立大学教育学部紀要，20，60-75.

モイヤー・尾間康子　1983　在日留学生の直面する心理ストレスの諸要因　国際基督教大学修士論文

大森康宏　1981　パリの日本人学校における文化背景の異なる生徒をめぐって　国立民族学博物館研究報告，6，597-628.

大西誠一郎　1982　青年期における親子関係―9―　台湾と日本の中学生における親子関係の比較に関する研究―愛知学院大学文学部紀要，12，1-11.

大野晏且　1983　現地校におけるアメリカ人教師の在米日本人子女への教育的反応の姿勢　東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要，2，79-97.

大嶋百合子・三宅なほみ・Dickson, W.・東洋・Hess, R.　1982　伝達課題における表現様式―日本の母親と教師の比較―　心理学研究，53(4)，207-213.

Okonji, M. O. 1971 A cross-cultural study of the familiarity on classificatory behavior. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2, 39-50.

Okonji, M. O. 1980 Cognitive styles across cultures. In Warren, . (ed.) *Studies in Cross-Cultural Psychology*, Vol. 2, 1-50.

Olowu, A. A. 1983 Across-cultural study of adolescent self-concept. *Journal of Adolessence*, 6, 263-274.

Orpen, C. 1976 Personality and academic attainment: A cross-cultural study. *Journal of Educational Psychology*, 46, 220-222.

大塚芳子　1983　私にとって異文化間カウンセリングとは　「文化と人間」の会編　星野命・斎藤耕二・菊地章夫責任編集異文化との出会い　川島書店　108-128.

Parsons, O. & Schnieder, J. 1974 Locus of control in university students from eastern and western societies. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 456-461.

Pedersen, P. B. Lonner, W. J. & Draguns, J. G. 1976 1981 (Rev. Exp. Edition) Counseling Across Cultures. University Press of Hawaii.

Pickford, R. 1982 A method for the comparative study of cultures through children's repesentation of school in play. *Projective Psychology*, 27, 18-21.

Pons, L. and Ecolasse, M. 1982 Commonality and reproduction of a word associated response in three samples of French, American and Japanese. *Psychologia*, 25, 205-212.

Posner, J. K. & Baroody, A. J. 1979 Number conservation in two west African societies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 10, 479-496.

Price-Williams, D. R. 1975 Explorations in Cross-Cultural Psychology. Chamber & Sharp.

Raina, M. K., Kumar, G. & Raina, V. K. 1980 A cross-cultural study of parental perception of the ideal child. *The Creative Child and Adult Quarterly*, 4, 234-241.

Reynolds, B. 1984 A cross-cultural study of values of German and Americans. *International Journal of Intercultural Relations*, 8, 269-278.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Ridley, C. R. 1978 Cross-cultural counseling: A multivariate analysis. *Viewpoints in Teaching and Learning*, 54, 43–50.

Roe, K. V. 1977 A study empathy in young Greek and U. S. chidren. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 8, 493–502.

Rogoff, B. 1981 Schooling and the development of cognitive skills, In Triandis, H. C. & Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cutltural Psychology*. Vol. 4, 233–294, Allyn and Bacon.

Rupp, M. & Nowicki S. 1978 Locus of control among Hungarian children: Sex, age, school achievement, and teachers' ratings of developmental congruence. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 359–366.

斎藤こずゑ 1983 環境としての文化と子どものことばの発達 国学院雑誌 国学院大学創立百年記念特集号, 336–346.

Saklofske, H. D. & Eysenck, S. B. G. 1978 Cross-cultural comparison of personality: New Zealand children and English children. *Psychological Report*. 42, 1111–1116.

佐藤弘毅 1978 海外子女の教育問題 学苑社

Segall, M. 1979 Cress-Cultural Psychology: Human Behavior in Global perspective. Brooks-Cole.

Segalowitz, N. 1981 Issues in the cross-cultural study of bilingual development. In Triandis, H. C. & Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 4, 55–92, Allyn & Bacon.

Serpell, R. 1976 Culture's Influence on Behavior. ESSENTIAL PSYCHOLOGY, (4), Methuen.

Serpell, R. 1979 How specific are perceptual skills? A cross-cultural study of pattern reproduction. *British Journal of Psychology*, 70, 365–380.

Steward, M. S., Furuya, J., Steward, D. and Ikeda, A. 1982 Japanese and American children drawings of the outside of thier bodies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 13, 87–104.

Snarey, J. R. 1982 The social and moral development of kibbutz founders and sabra: A cross-sectional and longtitudinal cross-cultural study. *Dissertation Abstracts International*, 43(B), 3416.

Stening, B. 1979 Problems in cross-cultural contact: A literature review. *International Journal of Intercultural Relations*, 3, 269–313.

Stevenson, H. W., Parker, T., Wilkinson, A. Bonnevaux, B. & Gonzalez, M. 1978 Schooling, environment, and cognitive development: cross-cultural study. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 43, 1–92.

Subhadhira, S. 1979 Cross-cultural comparison of correlation of self-concept of academic ability and self-esteem. *Dissertation Abstracts International*. 40(3-A), 1699–1700.

末岡一伯・松下覚 1981 文化差と言語連想 その2, その3 刺激語動詞について 僻地教育研究, 36, 61–67, 69–75.

Super, C. M. 1981 Cross-cultural research on infancy. In Triandis, H. C. Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 4, 17–53, Allyn & Bacon.

Sweeney, M. A. Cottle, W. C. & Kobayashi, M. J. 1980 Nonverbal communication: A cross-cultural comparison of American and Japanese counseling students. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 150–156.

Tajima, N., Mitake, K., Hamana, T. & Usui, H. 1978 A cross-cultural study on the nature of mother child interaction and its effects on child's cognitive growth: An interm report. Working Paper at the Research and Clinical Center for Child Development. Hokkaido University, No. 1

高萩保治・木庭修一ほか 1982 海外帰国子女におけるカルチャーショックの要因分析と適応プログラムの開発試行 東京学芸大学海外帰国子女教育センター

田島信元・臼井博 1980 展望 認知的社会化研究 教育心理学年報 第19集 (1979年度) 125–146.

高橋恵子・波多野誼余夫 1984 概観 児童心理学の進歩 1984年版 1–23.

高野清純 1979 動機づけ 感情と文化 星野命 (編) 人間探求の社会心理学4 人間と文化 朝倉書店 29–42.

滝上凱令 1980 日本人の図形認知機能(1)-E. F. T., GEFT による予備的検討—神戸大学教養部論集 26, 21–33.

詫摩武俊・星野命・柏木恵子 1979 座談会: Cross-Cultural Research のまとめと展望 心理学評論, 22 (3), 348–365.

Tanaka, S. 1982 Interpersonal communication situations and second language aquistion. *Psychologia*, 25, 81–90.

Tanaka, S. & Mizuno, H. 1983 A study on basic

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

color terms: Lexico-semantic development in Japanese-English bilinguals in New York. *Psychologia*, 26, 203–213.

Tapp, J. 1981 Studying personality development. In Triandis, H. C. & Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cultural Psychology*. Vol. 4. 343–424, Allyn & Bacon.

Tinloy, M. Y. 1978 Counseling Asian-Americans: A contrast in values. *Journal of Non-White Concerns in Personnel & Guidance*, 6, 71–77.

Triandis, H. C. 1980 Reflections on trends in cross-cultural research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 11, 35–58.

Triandis, H. C. & Lambert, W. W. 1980 Handbook of Cross-cultural Psychology, Vol. 1. Perspectives. Allyn & Bacon.

Triandis, H. C. & Heron, A. 1981 Handbook of Cross-Cultural Psychology, Vol. 4. Developmental Psycology. Allyn & Bacon.

筑波大学バイリンガリズム研究会　1980　日本におけるバイリンガリズム（最終報告）　筑波大学

Tucker, A. F. 1978 Empathy training for undergraduate college students in a cross-cultural milieu : A cognitive-developmental curriculum intention through psychological education. *Dissertation Abstracts International*, 38, (10–A) 6030.

Turiel, E., Edwards, C. P. & Kohlbarg, L. 1978 Moral development in Turkish children, adolescents, and young adults. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 75–86.

Wagner, D. A. 1981 Culture and memory development. In Triandis, H. C. & Heron, A. (eds.) *Handbook of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 4, 187—232, Allyn & Bacon.

Wagner, D. A. 1974 The development of short-term and incidental memory: A cross-cultural study. *Child Development*, 45, 389–396.

Werren, N. (ed.) 1977 Studies in Cross-Cultural Psychology. Vol. 1. Academic Press.

Warren, N. (ed.) 1980 Studies in Cross-Cultural Psychology. Vol. 2. Academic Press.

渡辺文夫・大迫俊夫　1976　小学生の人種態度とその年齢的差異　日本心理学会第41回大会発表論文集　945–946.

Watanabe, F., Borromeo, C. S. & Enriquez, V. 1977 Racial preference in three social contexts: A comparison among primary, intermediate and college students. *Philippine Journal of Psychology*, 10, 37–44.

渡辺文夫・大塚啓輔　1979　日本における異文化間心理学の研究動向（1960–1979）　心理学評論，22(3)，247–277.

渡辺恵子　1979　積木分類課題におけるティーチングスタイル：日米の母親と教師の比較　神奈川大学人文研究，72，29–56.

Watkins, D. 1982 Antecedents of self-esteem, locus of control, and academic achievement: A path analytic investigation with Filipino children. *International Review of Applied Psychology*, 31, 475–491.

Weinland, T. P., Gable, R. K. & Varming, O. 1976 Self-concept: A cross-cultural study. *Perceptual and Motor Skills*, 42, 43–46.

Werner, E. E. 1979 Cross-Cultural Child Development: A View from the Planet Earth. Brooks/Cole.

White, M. I. 1980 Stranger in his native land: Group boundaries and the Japanese international returnee. Unpublished Doctorate Dissertation. Graduate School of Education, Harvard University.

White, M. I. 1984 Japanese education: How do they do it? *The Public Interest*, 76, 87–101.

Wilson. J. A. 1981 Burton International School: Multiethnic, Multicultural Education. Detroit Public Schools.

Witkin, H. A. & Berry, J. W. 1975 Psychological differentiation in cross-cultural perspective. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 6, 4–87.

Xeromeritou-Tsaklanganos, A. 1978 A cross-cultural study of Greek and American teachers' perceptions of behaviorally disordered children. *Dissertation Abstracts International*, 39(6–A), 3522.

Zern, D. 1983 The role of schooling in socializing and skill-building: A cross-cultural study. *Genetic Psychological Monographs*, 107, 233–248.

Ziv, A., Green, D. & Guttman, J. 1978 Moral judgment: Differences between city, kibbutz, and Israeli Arab preadolescents on thc realistic-relativistic dimmension. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 215–226.

Ziv, A., Shani, A. & Nebenhaus, S. 1975 Differences in moral judgement of adulescents educated in Isreal and the Soviet Union. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 6, 108–121.

NII-Electronic Library Service